

重刊路常盤草

共八本
五十七

甲 內務省圖書
 第一〇三三三號
 和書部地理類
 第二〇二號
 共八冊

和書部
 九三一七
 一三〇一

內閣文庫
 和書部
 九三一七
 石文圖
 架冊號類

內閣文庫	
番號	和 9317
冊數	8 (1)
函號	175 7



教孫路帶盤州序

文庫道極 挾別國其大八例乃先下河...

内十一の二三號

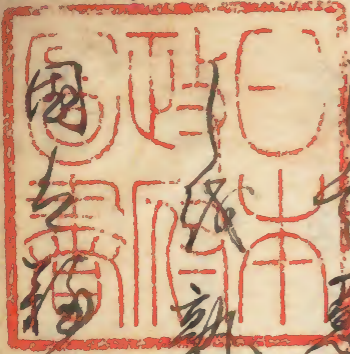
天... 神切と終るひ多...

大日靈太神天下志...

思... 八百萬伐...

孰... 乃西より...

乃西より... 陰海に横り...



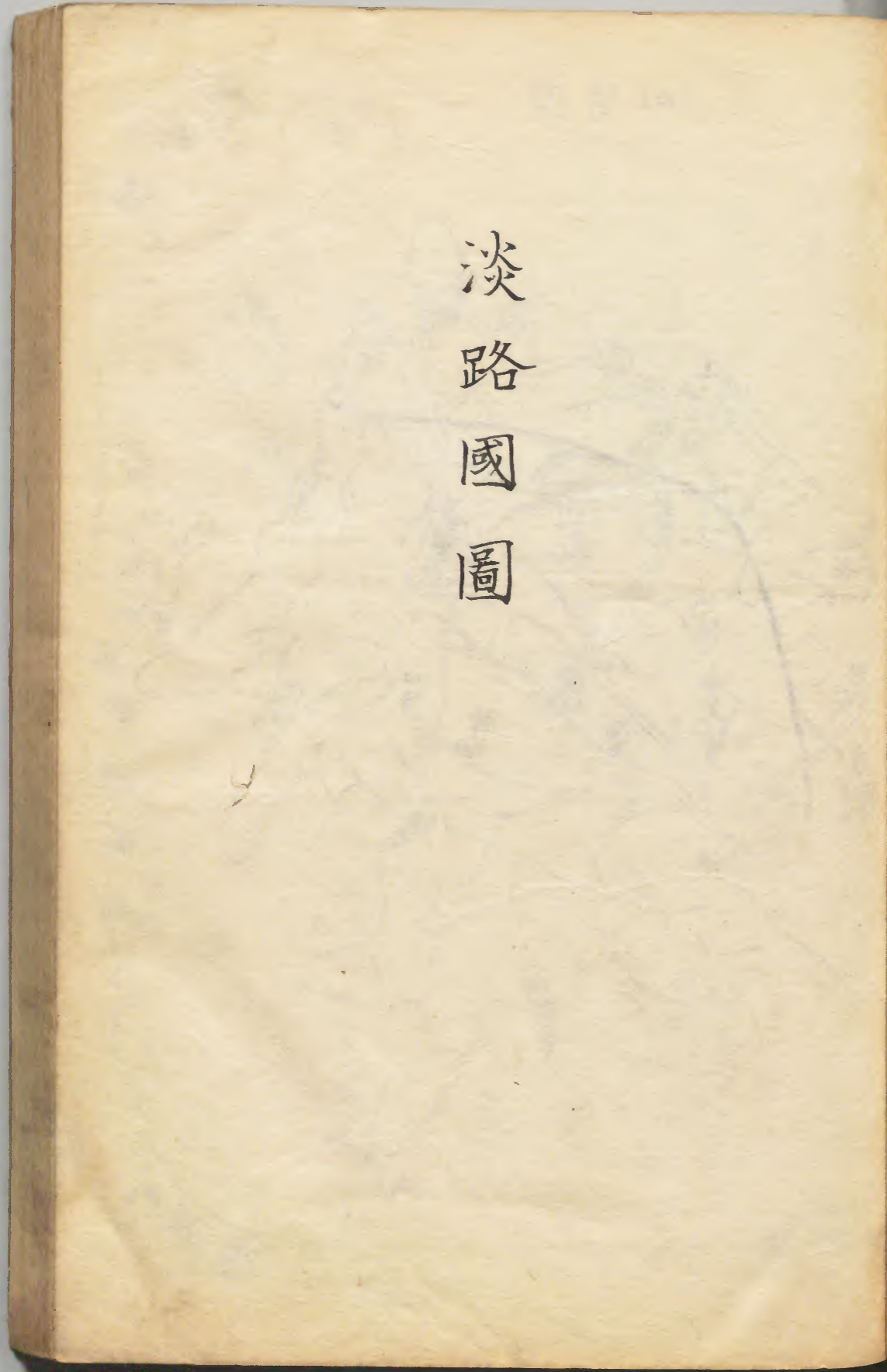
給ひきほ乃母母を國におとりて三原の
郡^{ヒナ}夷都を治るも治くれつむひ
國政を布^{キホドコ}播しあひき時移り世く
て皇^{スメラ}威も強め九^{ミイキツヒ}十六の敷^ヤ箱^ヤ隠れ
風俗改りぬされも天社國社^{フトシキタテ}に教^キを
一^ヒ支^サ極も多^タ寡^カ不^フ埋^メれ^ル幣^ヒを^シ司^シも^ク
山^{ヒサキ}陵^ノの^{サキ}寮^ノ廢^レを^シて^モ花^{ハナ}前^ノ北^ノ使^ノも^モ各^ノ事^ノも^モ四^ヨ

方の治るうりしと 東照神君の功業

いらぎうじうじは後そ安國とまき時
ふ通しを新がゆり古今乃蹟^トあひつ
る家^ノうら^ノち^ノわ^ノぎ^ノを^シれ^ル後^ノあ^ノま^ノ
事^ノを^シゆ^リし^も史^ノ冊^ノも^シに^シて^モ遺^ノる^ノ條^ノ
を^シ播^ルし^も治^ルつ^ぎひ^はあ^ノ老^ノび^ノの^ノを^シ原^ノ
新^ノ事^ノも^シひ^はあ^ノり^ノけ^ノり^ノを^シ集^ルめ^ル

去^ミ〜と先つまで風土紀の逸^{ウセ}〜うう徴をまよ
 縁^ミありあ^{フミトボシ}上書乞〜く〜情^ク考へかゝるゝれを
 浅ゆるの強き事おほくは是程やわ〜る國ハ
 天徳と余え道ハ日有との節〜常盤堅盤^{カキハ}
 久〜かゝる〜と〜お〜常盤州とあ〜命ぬ
 高保乃と仲野市雄格の道生よの筆を
 三つ〜日〜序次

淡路國圖



國津振

松尾崎

國磨播

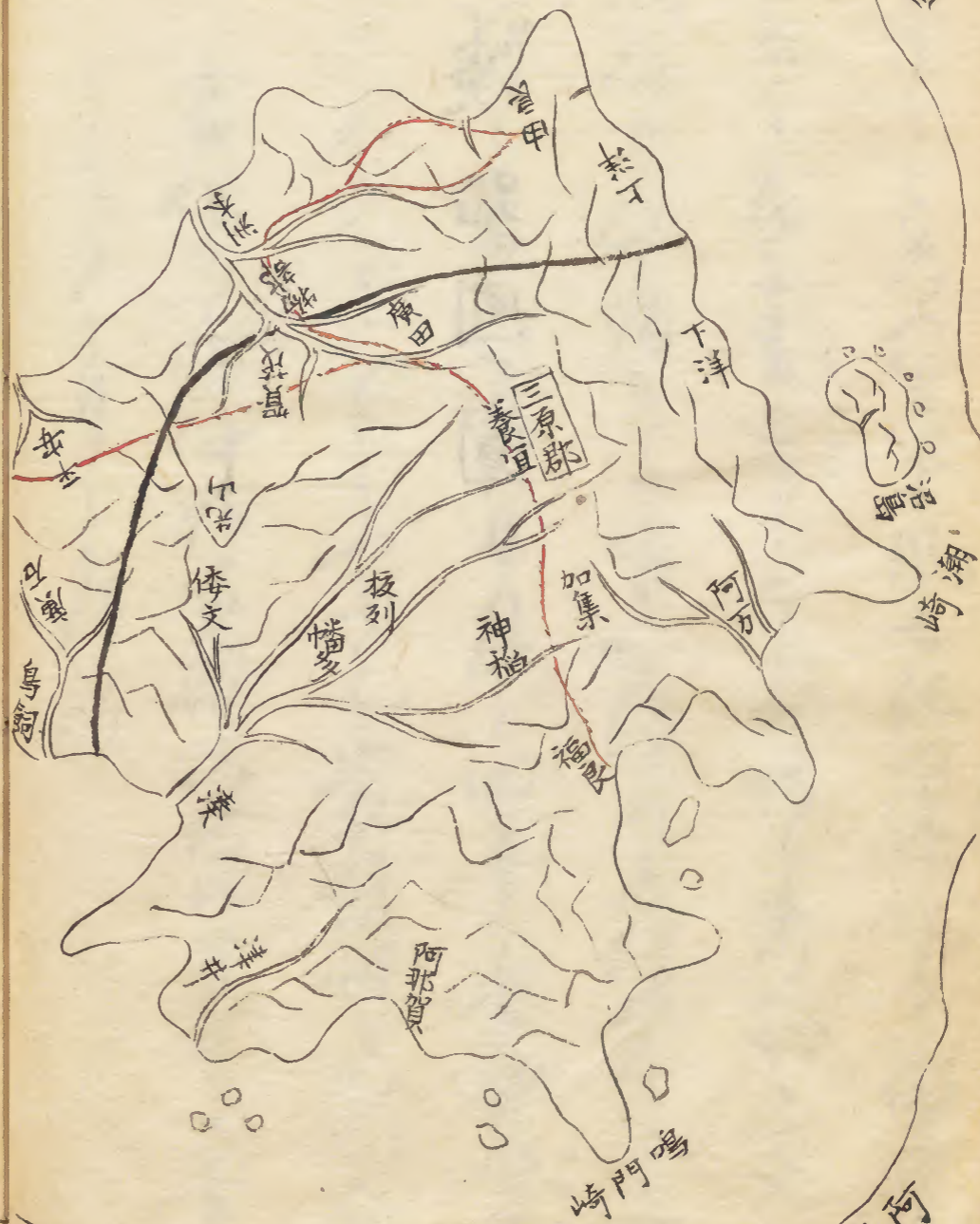
島豆小



國泉和

國伊志

鹽津



國岐讚

國波阿

例言

- 一 古書地名を言さる者摺換しし神篇に在り
- 一 古昔分つとも此郷を清和と名し考ふべし
ある今これと識別せし物とも郷名の村ありて是れ
の近例なりしを郷の右に附記し
- 一 村里の名はりのりあざりしを皆これを採り
- 一 唐田の如く郷は古昔清和郷に隸すとすとも今の割分
は後とす三原郷に改む
- 一 上下堺村もその他理清和郷に属すとす可と見えども
是又今の割分は後とす三原郷に改む

一 上洋二村を津君初とて下洋及浪流を三原郡と云を記し
所より今後田の修む者郡を修む

一 山川を撰する不多ありあり具あり

一 或内の神祠社地不修り今海定に治神祠名矣

一 あり叢社として拾来して載を名目しきり一

二と録して修む皆省し今封田より名に皆記を明神

と修む権現と修むと社号あり載せり

一 佛寺見立を名に皆撰録を度刺り一二これと

載り修む區に修むと記せられと索搜せり其小

堂も或ハ修むありと修む

一 古蹟人物史を修むと修むと修む今世の事修むくと

と修むと修む人街話修むと修むと修むと修むと

修む

一 各地の如歌輯り此に日中紀あり修むと修むと修む

修むと修むと修むと修むと修むと修むと修むと

詩歌修むと修むと修むと修むと修むと修むと修むと

僕を歳ありと修むの視徳と修むと修むと修むと修むと

修むと修むと修むと修むと修むと修むと修むと修むと

の字と修むと修むと修むと修むと修むと修むと修むと

山川と修むと修むと修むと修むと修むと修むと修むと

して地理の形勝を窺ひ古蹟を形考し古今世を
 沿革をまじりて記す其志は遠くも壯麗の耐ハ敢幹ありて
 曠日かあるハそくそくもつて其言の今よ
 りてハ遊記の志をこと倍せと結りハ始末と文を
 去りてハ後記の経度とそくか年ハ行や後生
 と終りてとそくそくもつて凡そ此の地は漢人ありて
 其果の仔てと物とそくあハ幸ありてと後行
 廬の南窓より記す

仲野古雄識

常盤草總目

- | | | | |
|----|-----|-----|---------|
| 卷一 | 津路國 | 雜著 | |
| 卷二 | 津名郡 | 物部郷 | 平安郷 |
| 卷三 | 志筑郷 | 来馬郷 | |
| 卷四 | 音波郷 | 郡家郷 | 都志郷 津名郷 |
| 卷五 | 三原郡 | 倭文郷 | 幡多郷 |
| 卷六 | 養宜郷 | 榎列郷 | |
| 卷七 | 神稻郷 | 賀集郷 | |
| 卷八 | 阿萬郷 | 廣田郷 | 賀茂郷 |

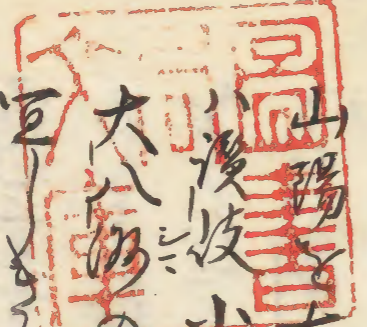
常盤草卷之一略目
泚路國雜著

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

重修 泚路常盤草卷之一

三原 仲野安雄 著

泚路國 南海道よりして幾内中洲と云う四國



山陽を^{アツキ}ち^{アツキ}す東は播津和泉南は紀伊阿波西
は淡路小豆島北は播磨その海中の一洲ありて
大八咫の中央に位あり日月の照りとあはれ
宜しきまゝありて名酷烈ありん土暖よ水

清く産物生とあはれと瑞穂の圃に海濱一
も舟國よりぞげと絶とありとを
日本書紀神代卷曰伊弉諾子伊弉册子^サ碓^コ取

盧岳^{ルノク}と海^{ウミ}ありて共^{トモ}為^{ナリ}夫婦^{フウフ}して例^{レイ}國^{クニ}を産^{ウマ}むと
お母^{ハハ}と産^{ウマ}時^{トキ}よりして先^{マタ}法^{ホウ}路^ロ例^{レイ}よりして胞^ウと
意^イは使^シさる^ルとありて夫^ウの由^ユは法^{ホウ}路^ロ例^{レイ}とあり
又^{マタ}曰^{イハレ}一^{ヒト}書^{ショ}曰^{イハレ}大^{オホ}日^ヒ中^{チウ}林^{リン}律^{リツ}例^{レイ}とせしむるは次^{ツギ}は法^{ホウ}路^ロ
例^{レイ}とあり又^{マタ}曰^{イハレ}をの古^コ法^{ホウ}路^ロ例^{レイ}をの胞^ウとて法^{ホウ}路^ロ例^{レイ}
とありと按^{オシ}は法^{ホウ}路^ロ例^{レイ}多^タくはれと省^{シヨウ}きて是^{コノ}
を例^{レイ}とせしむるは理^リありあはれは古^コ法^{ホウ}路^ロ例^{レイ}とあり
吾^{アハ}耻^チ 旧^{キウ}事^ジ紀^キ曰^{イハレ}先^{マタ}法^{ホウ}路^ロ例^{レイ}を産^{ウマ}む胞^ウとあり
みこられ快^{クワイ}さる^ルゆへは法^{ホウ}路^ロ例^{レイ}といふ法^{ホウ}路^ロ例^{レイ}とあり
吾^{アハ}恥^チあり 今^{イマ}按^{オシ}はあはれあり古^コ法^{ホウ}路^ロ例^{レイ}とあり

是^{コノ}とよあまらとありてはあはれありとありては是^{コノ}
釋^{シヤク}日^{ニツ}中^{チュウ}紀^キ曰^{イハレ}二^ニ神^{カミ}初^{ハジメ}く小^コき法^{ホウ}路^ロ例^{レイ}を産^{ウマ}むと
産^{ウマ}むるはひらき古^コの由^ユは吾^{アハ}耻^チを山^{ヤマ}とありては
今^{イマ}按^{オシ}は釋^{シヤク}日^{ニツ}中^{チュウ}紀^キの法^{ホウ}路^ロ例^{レイ}の古^コきを死^シす
りてはひらき子^コを産^{ウマ}むははれは婦^メ人の常^{トコロ}性^{セイ}をば
あり 國^{クニ}名^ナ凡^{オホ}土^{ツチ}紀^キ曰^{イハレ}はあまみ二^ニ柱^{ハシ}北^{キタ}神^{カミ}
瘦^{スホ}牙^ガと指^{サシ}して陰^{イン}海^{カイ}と稱^{ナヅケ}ありては古^コの法^{ホウ}路^ロ例^{レイ}
はしるは漸^{シヤン}く例^{レイ}とありては陰^{イン}海^{カイ}の中^{ナカ}は法^{ホウ}路^ロ例^{レイ}とあり
是^{コノ}は法^{ホウ}路^ロ例^{レイ}とありては今^{イマ}按^{オシ}は古^コの法^{ホウ}路^ロ例^{レイ}
とありては文^{モン}をよみては法^{ホウ}路^ロ例^{レイ}とありては神^{カミ}

代表の紀の音耻のさきさきありけりては國名
此の統用也アハガと云ふ
日本紀の淡路阿波施アハガの紀の淡路アハガ音
耻ダと云ふ事案路とも書り凡わりの
古書多しハ漢字の音州と云へ古書と云ふ
文字と拘クと云へ古書と云へ名義と云へ
万葉集の淡路と云へみりともよみたるハ古
よかみひがさるれどもちとみりともよみたる
と云へ物モノたる事あり
淡路の別名あり 旧事紀曰大八例
穂狭別傳ホノサワケノヒト

と云へ見ミと云へ淡路別と云へ淡路之物之狭別
と云へ古事紀曰御合ミコトニクハヒと云へ子淡路と云へ穂狭別傳
と云へ神代口訣曰八洲各有国魂例成精神也淡
路神号穂狭別 今拂イマフキと云へ或云穂狭別ハ四魂
の名也國造と云へ同ナニと云へきと云へ

御食ミケ向淡路 今拂イマフキと云へ出デと云へり下シタと云へわんワンと云へ
松詞燭明抄曰淡路向淡路と云へ好島の海士矣
と云へ天子此淡路と云へお白シラひと云へり仁徳天皇
因ユ今拂イマフキ仁徳紀曰皇位空乏經三載時有海人
賈モリ鮮魚之苞苴アサヒキマツノ獻マホム菟道官也太子令海人曰我非

オホサキキ

天皇乃返之令進難波大鷗鶴尊亦返以令献菟

道^ニ於是海人之苞苴^ヲ藉^ニ於往還更返之^ヲ以令献菟道

取他鮮魚而献焉^ヲ讓如^ニ前日鮮魚亦藉海人若^ニ於辱還乃棄

鮮魚而哭^ヲ故^ニ彦日有海人耶^ニ因已物以泣其是之

緣也^ト今^ニ按^テ予^ノ志^ニ修^ル路^ノ海^ノ人^トも^もあ^けれ^ルも^も意^ニ神^ニ紀

二^ニ修^ル路^ノ御^ノ原^ノ海^ノ人^トあ^らし^めり^しり^とい^はれ^りあ^らん^と一

如^ニ食^ハ津^ツ國^ト是^も義^ニ系^ニ集^メ出^スり^今按^テ流^ニ合^ハ向^ハ後

路^トい^はれ^りあ^らん^と一

風俗^ノ人^ノ國^ニ死^シ日^ハ流^ル路^ノ國^ノ風^俗を^傳へ^ルの^由人^ノの^手

健^ク力^クし^て何^れも^も信^じり^しる^ハ親^ク類^ト孫^ト若^クと^いは^れる^ハこの

節^ノ目^トと^いひ^し縦^ニ交^ハ結^ス乞^フ丐^ノの^若も^も乃^ハ素^ノの^風あり^とさ

ま^もも^も都^ノ志^ニ情^ニから^しり^とま^もも^もあ^らん^と返^ルる^のあ^らん

武士^トも^も実^ニ義^ニあ^らん^と達^ノ人^ノの^出す^ハあ^らん^とい^はれ^ん

又^ニ日^ハ南^ノ國^ハ純^ニ伊^ノ所^ノ彼^ノの^間の^海中^ノの^島あり^と日^ハ遠^ニみ^る海

あり^とて^も山^ノあり^と境^ノ界^ノ廣^クく^もあ^らん^と南^ノ方^ノは^も暖^クも

あり^とて^も民^ノ俗^ノ柔^ク弱^クと^いは^れる^ハあ^らん^とも^も孤^ク島^トも^も実^ニ義^ニ

人^ノ托^テ名^ヲの^書と^いは^れる^ハ流^ルる^の説^ニあ^らん^と今^ニあ^らん^とい^はれ^ん

異^ニ称^ス宋^ノ史^ノ卷^ノ四^ノ百^{九^{十一}}日^ハ本^ノ傳^ノ曰^ク南^ノ海^ノ有^ル流^ル路^ト云^ク云^ク。

友^ノ野^ノ平^ノ振^ノ録^ノ卷^ノ四^ノ南^ノ海^ノ道^ノ交^ハ路^ト云^ク云^ク。圖^ノ書^ノ編^ノ卷^ノ五^ノ阿

波相近懸海ハナテ為淡路。武備志日本圖中有淡路
州圖淡路島圖。同日本考。阿波相近懸海為
淡路。同卷十二百疆域考。南海道州淡路六。
同譯語。淡路阿波。皇朝世法錄卷九日本考。
南海道於路。蒼霞草卷十南海道交路。
海東諸國記。南海道淡路州。郡二。水田二千七
百三十七町三段。今稱之淡路圖。州と島とを
別と易す。八條多し淡路。淡路と作りの八條
く異稱日本傳よるなり

淡路島 又ハ淡路島山。淡路島と和名よりあり

日本紀十卷應神天皇紀曰淡路島ハ海ノ移りて
福波の西よりりガケ峯イホ巖イガ移りてニシ凌谷相續
きキキ芳州モクシゲ蒼蔚りキナヒ長瀬ナガ淡路ナガよりオホ麋シカ鹿カモカリ鹿カモカリ
多くその島よりり 今稱之六の島ハ淡路海北
中よりりて山川秀多あり 倭吉エの松間ナニ淡路の
浦頭よりりもきくをむは標南風電の系キ氣キの
變りカハ久しかりき 倭はあやしきみもの
ありへこの由は古今ムカシの人歌詠詩賦りて
ありと變りむしとたぬし 但今詠の詠は
これと異りぬ

日本紀曰。應神天皇二十二年春兄媛吉備エロメキビみ使ぬ
天皇イテを尋ねて見媛の船とて詔す曰

阿波施禰戸 美柳敷ぬ那羅耳阿豆枳禰戸美柳敷ぬ那羅
あけちしきよふたあひ。あつきまよふたあ

耳豫呂禰枳禰戸之鹿儀伽多佐例阿羅智之吉備
ひよろしきしき。たがたされあちしきび

那流伊慕鳩阿比流菟流莫乃
なるいもと。あひみつるもの。

抄すまは新紀二曰徐二並
と八流路仍と少き島とを
並つると云ふ新紀抄曰たされあちしとハ巧の年未詳推
量すまはたかひ流ち多しなれはたか助またわすれたとほみと
よしとされはをあちしハあちとと二の島のわらひと
流ちかく流ちきとあちとあひて見媛と敷屋と流ちひきに

今別記云々也のるまろりと
論させりふろし 女能日見中紀系をなす

伊弉古治禰禰焉故略加解下皆倣之
万葉集卷之三羈後分 撰本人麻呂

粟路之野 島之崎乃濱 凡尔

あはみちのの まうさきのはまわせにけ下累を那島の
るよとて 同羈後分

海若 者 灵 寸物 香 泠 路 島 中尔 立 置

わたつみは。あやしきものか。あはちしよ。あかにたてき
而白 浪半伊与尔廻 之座待月 冥 乃門従者
てしりあみと。よたにめくし。いまちつきあかしのとはは

暮去去 塩 年 令 滿 明 去 去 塩 年 干

あさはは。しほとみてしめあさはは。しほとほさしめ。

塩 左 右 能 浪 年 恐 羨 決 浴 島 殘 隱 居 而

しほさるのなみとかしこみあはちしさいそかられめて

何時 鴨 此 夜 乃 將 明 跡 待 從 尔

いづしかも。このよのあけむとまのよりに。此分と略も

揚子中を主とし、後終海を海中より多く入る所、十八日の存多
究の發終あり、分の高は世界の海を之し、はるし舟と終終、海
は對ては、夜の
ゆを待つとあり

同集卷之四下 觀世宗時作分 丹比真人 笠麻呂

天 佐 我 留 夷 乃 国 刃 尔 直 向 決 路 年 過

あまやかる。ひふれくにへに。たむむわふ。あはちとすき

粟 島 年 背 尔 見 管

てあはしまたとろむひよみつ 上下 畧

同集卷之六

御食邦国 日之御調等 決路 乃 聖 島 之 海 子 乃

みけつくにひののみつきとあはみちののしまのあまの

海 底

わたのろこ 上下畧 群島 の下よか

同及歌

朝名寸二梶

音

所聞

三食津国

あさふきにかちのどとまこゆみけつらに

下畧所
作し出

同

名寸隅乃船瀬後可見 決路 岳

なきすみのふちせにみゆあつちま

下畧松帆
海よ物え

同

真梶貫 吾 榜 未 老 決 路 乃

夏かぢぬきわうこきんれはあはみちの

上下略
ぼるる

回過^ニ敏馬浦時佐奇

山部宿祢赤人

御舎 合 決 路 乃 岳 二 直 向 三 犬 女 乃 浦 能

みけむふあはちのしまになむわふみぬめののの

奥部庭 深 海 松 採 浦 一 回 庭 名 告 藻 荇 深

ときくにはふりみるつみるわにはあつちとかりふか

見流乃見卷 欲 跡 莫 告 藻 之 已 名 惜 三 間 使

みるのみまくほし^{イニケ}みとあつちのうろのそのかふしみる

裳 不 遺 而 吾 老 生 友 奈 重 二

かひもやすすてわれはいけりともたんに

那^ニあり欲見^ニしよ奈^ニ重^ニ生^ニのしりあ^ニのま^ニは^ニ妹^ニと^ニと^ニ心^ニは^ニ赤^ニれ^ニも^ニあ^ニ名^ニの^ニ漏^ニん^ニり^ニと^ニな^ニれ^ニて^ニ使^ニと^ニあ^ニり^ニて^ニ回^ニと^ニを^ニあ^ニす^ニけ^ニる^ニる^ニも^ニあ^ニし^ニと^ニ

同集卷七 揚付他分

作者未詳

雅波方塩 干舟立 而見渡者 淡路 島亦

奇にもしくく 何ひはたちてみわさせはあらの奉に

多豆 後 所見

たつわらむみ也 揚多豆ハ糖あり 續古今雜下
ハたつわらむみとあり

同 羈旅作奇

作者未詳

荒 磯 超 浪 辛 恐 見 淡路 島 不見哉 将

ありそこをふみさう しみおはちし内みすそやす

過 幾許 近 辛

きむろくたちわきを 揚淡路島と云ふれは淡路の島と云ふ
て親しくするのそはぬハ根一とと

同集卷十二 悲別歌

三十一 首内

住 吉 乃 崖 尔 向 右 淡路 島 阿 怜 登 君 辛

すみら一のきしにむるあまらしまあまれときみと

不言 日者 無

いとぬひはあ 揚口口ノ不離一人をさふふとあり
住吉より淡路の島へをさふふの構(きま)

比云古来凡狎ハ口をさふふとあり
ハ云古来凡狎ハ口をさふふとあり

月 還 来 筑 紫 海 路 入 京 也 揚 慶 国 家 島 時 作

奇 内 作者未詳

昔 姊 子 平 行 而 早 見 淡路 島 雲 井 尔 見 延 奴

わきもことゆきえはやみむあまらしまくも井みぬ

伊敷都久良之母

いふつゝゝゝも

梅子家傳よりをうけつたをうけつた家系此頭
をうけつたをうけつたをうけつた

同集卷十七 天平二年度午十一月太宰帥大伴知
人被任大納言兼帥上京之時備後等別取海路入京
於是悲傷霽後各陳所心作歌

倭路 魚 刀和魚流 舟乃可治同尔毛 吾老不
あはらし〜とわらわぬのむらまにもわさはわす

忘神帶年之旨控毛布

れす〜と〜と〜と

梅子新古今意云赤人
のちの家と君と作

古今集卷十七雜上 よ〜人〜人 わらうみのかぎに

させし白妙の波も〜と〜と倭路〜と〜と

重集卷四冬 源魚呂 あはち得魚子ふきの水

了急〜と〜と救済急〜と〜と同書源魚呂梅子
八部部

新古今集一書上 倭魚流 幸と〜と望み〜と

〜と〜と海路〜と〜とあ〜と〜と内山

同集又抄下 大伴心急系 梅原〜と〜と此島

方ゆ〜と〜と舟〜と〜と海凡

同集雜云 元河内新恒 倭路〜と〜と河波門をよ

み〜と〜とを〜と〜とあ〜と〜と河波門

新勅撰集雜四 中院道在矣 倭路〜と〜とわら舟

多し尚ほむ八重三十三の巻あり

目録 前内大臣 後路為志の

事あり 五巻あり

續古今集十八巻下 上人部人 後路為志

こちてみらるるは後路為志は旧籍ありとる

目録能中 前大納言忠房 ありは後路為志

山の端より清くく月見さしとるこり

後路送集春上 中務少輔等親王 浦をき後路

事の夕あきたにのりありありとる

目録三巻 前内大臣基 ありは後路為志

任吉の浦のむかしりの村あり

新後撰集巻 前大納言ニサトキ 雅言 海や波や

りこ白巻れきる浮城むありは山

ありは集巻上 前大信正実平 後路為志

入けりありありありありとる

目録林下 後撰集流時 冷泉方吉政大臣 後路為

波をわけて入月はありありありとる

目録 後二位家隆 後路わたりありとる

浪の上より海士の神やきとる

目録巻 家隆 ありは後路為志

深きもひらの宮屋の時のもよもよ

同集冬 希参穰恒盤 河より海迫川の海風

そよよし素のつらきとぞ志きりあり

淡子裁集秋下社十 希大細云為氏ふにそよ

海よりとらの舟影は海もへたてぬ河より海山

凡雑集秋上 希余宗泰 此の浦や海路の末も

舟影と夕日と海とあつらひし心

新子裁集秋下 後照念院宮高太の末も 有明の

月ハ海より影とそよ浦風遠くあつらひし心

同集秋中 希大細云公落 希代の海坂の松は

木の向より名にそよ海あつらひし心

希代紀行 冬下

新子裁集秋中 花園院の製 希代紀行

海路と舟の夕日と海とあつらひし心

新子裁集秋中 希中細云定家 海路はむらひの

雲の村と舟影もそよ海とあつらひし心

同集 希中細云希重 希代紀行の海もひらき

さゆ日乃雲をわきし心あつらひし心

同集 希 希みくそよ海 河より海迫川の海風

吹きよと舟と海とあつらひし心

海門

同集秋上 津守國を 希夕よみればそよ

任吉丸浦よりいさりのあまらしくいふ山
 新續支る葉抄下 秀大御を為氏 吹雪浦
 ありをの汐風と麻の音ちりきあつらふ山
 同条 龍上 四辻入乃かた大信 任吉丸浦は吹雪
 見えわかつてあまは海ふあまらふ山
 支本条 忠聖御信 信路信儀曲のさく
 さげまありうらををわくは迫門の汐風
 同条 光俊 ありら浮舟清舟の舟まき
 あまもそわつらふ山
 同条 信路信儀信路 信路信儀のりよ

舟と舟と浪の音あつらふ山
 同条 氏部御為家 あつらふ山
 秋風と舟と帆とあつらふ浪の音あつらふ山
 同条 荻原親佐 ときあつらふ山
 うく浪と舟と帆とあつらふ山
 同条 俊忠 信路あつらふ山
 きけを磯あつらふ山
 同条 後九條内大臣 ねたつらふ山
 かす心波の音あつらふ山
 同条 ときあつらふ山

同系 勝業法師 下略
同系 定家 わかのうらに打あてたは、法務卿
有り信守八重の法風 紅船
同系 仲正 船を
同系 藤原尹明 船を
清くとは法務の為より月をかし 梅田
同系 為家 船を
うにみそうすきあり 梅田
同系 公朝 那古の海に
をきとて 梅田

同系 為家 忠明の迫門の法を
云ふから 梅田
同系 繁 千多北江の
同系 高泉 法務卿
同系 慶 法務卿
同系 喜多院 法務卿
備棹の

回集 歌指 いかたをいふ也 下景花 奥山

回集 氏部が為家 倭語傳りてをいふ也

やまも海家友なる也

新六帖 為家 倭語意をわくも舟は舟也

思ひ定めん所也

回集 吾道内大臣 ありし倭風草にわく

去舟の如く橋の音をゆく也

抄也 意法 一は茶室の海に舟の

有明の舟はありし 教付

回集 意法 西へ行倭語の傳れ傳り

むづの重をいふ也

回集 意法 震 海や心の東とせくは

舞よ物に倭語一也

回 交崎 衣はく有明の山とありし傳

任吉のねえ風を涼一也

回 亦鳥 倭語一也とわくも亦鳥心せし

夕風をいふ也 十舟此舟也

回 紹去命合 海色なる 倭語傳りてをいふ也

吃しね風をいふ也 十舟

回 海路 海舟の心とて其時やぬ事ありし

あつらひし由心

同 石の白 浦色ある 何れも好む多きをれく

新 部 妙なる 月の影を映しき

同 難 中 其 清 幽 好 存 其 心 といふ 何れも

相 風 といふ 立 明 好 意

同 難 左 右 年 月 一 又 せ づ や あり け 好 の け され

名 と さ なる 物 を 池 の ち り とい

同 百 難 難 友 入 月 け といふ あり け 好 け け 九

人 と 及 び 及 といふ け け

壬 二 集 家 隆 清 幽 好 難 友 といふ 又 海 色 は

波のつらのはのあつてありあり 梅よりかはるべきあり

書体の中へ筆をまはり 秋行巻の化より

同 集 あり け 好 意 といふ 林 の 清 風 といふ け け

承 此 あり け け

同 秋 山 月 時 一 あり け 西 風 といふ け け

存 といふ け あり け 好 意

同 世 其 冬 といふ 任 吉 の 相 け といふ け け

と といふ け け 清 幽 好 意

同 眺 望 又 海 色 は あり け け 何 なる の

海 といふ け あり け け

拾遺五系 友原定家 海上約月 陸路一由
姑息とむとわさしりて出も進一十六夜月
同系 如早率名高百首中冬約子高 陸路約
外高とわさるるににふかひもあつたをかひさ
同系 約数高 浦月 あらね高 舟如新もて
ゆつとすまかけてかきせる 此戸のこも波
同 如世百四属凡 千高 陸路と 陸路凡 舟乃
ともうかひ入 到る 海高も
山家集 西行法師 冬約 夕高 舟高 陸路約
通門のゆ平れ 舟高も 舟高も 舟高も 舟高も

同系 子高 陸路 舟高 舟高 舟高 舟高
せとれ 舟高 舟高 舟高 舟高
同 舟高 あらね高 舟高 舟高 舟高
舟の舟高 舟高 舟高 舟高 舟高
西行百首 寂蓮法師 陸路 舟高 舟高
舟の舟高 舟高 舟高 舟高 舟高
達仁高合 家長 あらね高 舟高 舟高
舟高 舟高 舟高 舟高 舟高
舟高 舟高 舟高 舟高 舟高
舟高 舟高 舟高 舟高 舟高
舟高 舟高 舟高 舟高 舟高
舟高 舟高 舟高 舟高 舟高

昨急千尋 孤鴻集 舟心口をこころもて
 任若此存のむくやわらうしゆ心
 同 孤鴻集 今朝をたふしにえぬ 漢語集
 物々如海り 積る白雲
 系代 長才 秋風の音河とききけし 漢語集
 時西とどろく 暮たむしあう
 物河百尋 昨秋 あらうしゆ 白雲集 下西語
 同集下 海路 中納言道房 大徳や漢語のせと
 吹雪にたふりくさるれ所帆かかん （一）あり 大徳集 中二
大徳とあり
 浪語 漢語集 漢語の響れ （二）あり 漢語集
 新集系十七雜中 中納言為忠 任若此存の仲の
 汐金一清いあうあう清心
 同集 雜中 前大納言宗房 舟心は雲のしり
 くに有的の月少をえぬ あらうしゆ心
 同集 雜中 前左近中納言氏母 わるれ原を云と
 彼より南まほほのかにえぬ あらうしゆ心
 同集 雜中 堀村上流製 朝日影さるか時あり
 わらうしゆあすあはさぬ 漢語一ゆ心
 同集 雜中 心何れよとこともあうしゆ漢語集
 まこと人ばあかともえん心

日集 村上 從三位國量 任右の侍とふかあて

立寄ふ河をわたりし山

奥義抄 七種查体中難會体 賢人久年廣足

借 我山 峯 漕 舟 濃 菜 師 寺 決 路 乃

かひう山みねく舟のやくくありのし海の

梨

倍良

かすすきのつら 後成哉
ニモ出

三部無名賢注 忠盛 任吉のむいひのくは

もあれや 堀凡 葦了あつら山

秘藏抄 恒 ありら 舟きくく 舟れ 梶 者 也

けの 舟や 友と きくく 心いさく

名集 歌柳 あつられ 燈 舟 後の 下見燈
舟

續 相 系 集 あつら 舟 あつら 舟 是 舟 是 舟

さくく 舟のくきは 舟れ

日集 後 舟 せとれ 舟 舟 舟 舟 舟

く 舟 舟 舟

日集 あつら 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

河内門なる法臨れ流のありき人物、澤をく
すむる東の月

日松風毛 源氏 めつりもくもよそをかり
さやけらや法臨の流れ河内門なる月

井地抄 廣の社多合 季言 清とみれ垣の心は
法臨のからきまに流るる

日抄 播磨の約あり母乃 源のこりにも
えくもるる山はあり公流のこ

系原系 秋河法臨 法臨の心は
は季言のこ 意 法臨の
漸清わらるる母のこりともえぬとらう

日集 冬約 法臨のありき 河内門のこり合
けくくと法臨のありき

日集 新約 雨後 常よりもえぬとらう
此の心や母の法臨のありき

日集 物名約 系原

麻菜 薄 粟芽 水梳

あきあきとさきけつりやわらわのこりあみあき
萩 藻蘭蘭

お起し母のこり心
日集 連哥 じうあか中へさきあき

り 是より此海よりわすむあらしは
栢木集 後栢原院法製 河原の浦の宮もあえ
く、法終りの法終もをくあらしあり
日集 船八夕湯映流 任吉や木のうらに
あらしをとり物とあらしは山
高玉集 雲流 若布山 是く世の落うあらし
くくくあらしのあらしは山
草根集 正徹 ありあらしは山
たりよりくくあらしは山
紫雲澤庵和百首 雲流 若布山 是く世の落うあらし

雲流くくくあらしは山
新明部集 基照 あらしは山
あらしは山
名物詩集 任吉八景中 法例落月 桂叶因
月夜星輝曉霧晴海舟横去棹無声蒼茫極
目前刈岳十里金波一様清
日集 尾崎八景中 法終朝音 新劍石舟
法終急流南海見朝 二冒霧遠相連慈有音因
初集此渾沌程存大古帝
日集 陶谷十景中 法終残月 羅字草

南海水而生一漚素域在劫法既別渾沌氣人淺
孝以嘉滿之凝結倍方杖今求全皇映彼浪天
光雲影照雙眸慈氣玉兔出岩巖可惜王母鏡
欲收吾聞乾坤生後子世遠元是同胞麻涉踪
忽被曉風晚姬姪浩堪向而流但吉扣門誰眺
望爭女身裏十二樓

詞林意行集 梁南和為 尾張數見 從尾別熱

田迄藝陽廣岳路行詩中 漢路岳

朱薨碧瓦聳雲間突兀堞樓非敢攀任吉松原
霧暗近粉波葦浦浪清閑朝報澄厚臨相火暮

留客船宿水灣此景昼工可拋筆月懸泚路岳
高山

同集 石川左近山材岐 藝陽道中詩中

過泚路嶽戶 一望千里一扁舟高掛征帆過
泚別送汎洄波曾不起天風吹送海門秋

同集 和石川山材藝陽途中詩中 泚路嶽

羅山子送來 竟永 回首汎洄送客舟猶望
日中亥初別彥名岳下過新地廢帝遷來

度幾秋

同集 和石川子藝陽途中詩中 過泚路迫

只目明て事案此に一一く羈縻の志ひしところありし
きまゝに麻笥あたる草木をそとぬきと吹あらしめ
かく海をさひとささるる六百ありしが五百とまて三
里福島の海よりつぎうはすま風をけしとて二百海島を
見く君れおきすまきく吹りて海士の管原のかり松
物ありれよめて又られけきハとさるる風をく海よりきて
ありぬ海よめく神家 ちくされもあかひよあゝあゝ
こそ様とはいひきくらむとかりて佛神に懇祈す
れハをさすくはや風波をさゆり十は細長き海より船
のりてあ波の舟門とさるる様は佐佐田にむ海島三百餘

海に入るく海島は心とたのむの海あり

野峯古徳傳曰道範泉陽船尾人也高野山八傑之一
也建仁二年入住宝光院後移正智院仁治四年春坐
根嶺之事竄讚別建長元年逢救歸山在南海凡
七年其流宕之履歴記傳

梅ま仁治ハ四條院^{八十一}の号あり四の寛元と改え寺
将後海院^{世七}元之^世頼朝將軍の世ハ四條院^{時頼}院
格の時く招ありれ海海よりりてる聖山荒平舟人京
於の夏雁よりよ之死流ち^時の紀行あり流路より流
のくハ実弘上人くあまハ小豆原氏^時後の時を考す

二府ありありと一府ありありの時に波の門を
海にゆきよつとわきまありと云えり此の海に
とあり

浪路國田租 是より下本の多きを以て浪路と計

和名類聚鈔源順朝 日南海國浪路 阿婆浪路
臣著

國管二津名三原波國府在三原郡行程上

四日下二日田二千六百五十町九段百六十

歩正三萬五千束公四萬九千束本類十二萬

千八束雜類四萬六千八百束

按より日中紀孝德天皇紀及布野田令曰凡田長

三十歩廣十二歩と段と一十段と町と云令義解

曰段地稻五十束と獲一束の稻ツキ替て米五升と云

之町と云る者あり田令曰段租稻二束二把

按より三百六十町と一段と一十段の租米一斗一升

之是二十五分一町の税也

三代実録卷三 十九陽成天皇元慶五年正月廿六

日乙亥令浪路國乘田穀類四萬六千四百三十

六束勘益田二百三十五町載税帳以前守外

從五位下伴連貞宗申請

延喜式^{卷二}主税式云淡路国正税三萬五千

東公廨四萬五千束国分寺料五千束大和

国魂神祭料八百束文殊會料一千束修理池

溝料一萬束救急料三萬束

拾芥抄曰淡路^{近下}二郡津名三原^府田二千八

百七十町

延喜式^{卷二}民部式日年料別納租穀淡路国

一千六百斛

續日本紀曰聖武天皇天平十七年十一月制

諸国公廨淡路三萬束

按^すま^ま正税ハ租稻ノ田賦と租と^り公廨ハ穀倉

ノ或説^ハ正税ハ京於^上云公廨ハ國府^納め^る

國司^{より}支府^の雜用^料ノ^亦用^すと^り文殊會^ハ

仁明天皇天長^{乙未}元^無寺^の佛^泰善^望造^り

と^りて京^畿七^道造^國守^爲^太政^官と^りて毎^年

七月^八日^の儀^と終^りと^り

又^按す^租の^外庸^調の^租ハ^亦之^庸ハ^支役

之^調ハ^家役^ノ儀^也賦^役令^云元^正丁^歳役^十日^差

須^收庸^志布^二丈^六尺^云云^云正^丁と^ハ二^十

一^丁と^ハ六^十と^ハ其^の内^と云^支役^ノ使^ハさ^る儀^也と^布

今又云凡調絹絶糸綿布並隨郷土所
出正下一人絹絶八尺五寸六丁成正長五丈
一尺廣二尺二寸云云 其郷の産物と家別
出以之れと云調と云絹布あり是之何處も成下
不成下深戸不深戸等の只より遠行りあしくハ
今と云々

由加物 多し用ゝ意あとのりなり

延壽式七ヶ種紙部 踐祚大嘗系曰凡應供神
治由加物各料 神治号雜器曰由加物 淡路國
雜費曰為由加物
所造倉二十日 各受一斗五升 比良加一百目 各受一斗

二百口 各受一斗 其幣五色落絶各三尺俵文三尺
木綿麻各一介葉薦一枚作具、鑿斧小斧各二
具繰二丁造汽使高國凡直氏著木綿變執賢
木引等 凡供路等國造由加物使向京之日
路次之國掃道路祇兼

按大嘗系料のためよたの教とけまう調水せ
くしと倉切か甘みとみふ土器の類と神供と成
昔今も所田村土器作りのありむいゝ要をか
作し進作るゝ絶ハ令義解云細為絹麻為
絶と云々 倭文釋日本紀云倭文有青筋文布と

絶も倭文も幣の料之本綿八回奉紀云穀木蓋
云楮穀木之稱紀云木綿共桑麻其皮為之木
綿かぢのし麻の料之回奉紀曰令麻
績祖長白羽神將麻以為青如幣後令作ひ見
神將殖穀ぬ以作白和幣

儀式ひ踐祚大嘗祭儀下曰 淡路國 御原

郡 瓮十口斗受各一比良加斗受各壹百口斗受各

太三糧國所造備 五色薄絶各一尺五寸

倭文一尺五寸 木綿 麻各八兩 鍬一口

芥一柄 小芥一柄 薦一張 右九種幣

帛料所給分以前得神祇官解備供在大嘗舍
其所由加物依例所請如件因宣兼知依敷造
備進上

儀式二卷大嘗祭儀上 左右衛門府申官令治

國量程進物部門部諸部等 治部老云淡

路國二人 神祇官差卜部三人差遣紀伊淡

路阿波國等 監祓由加物各到國大被云云

儀終斗受小瓮廿口斗受比良加一百口斗受廿

二百口斗受其幣各五色薄絶各三尺倭文三

尺木綿麻各一升葉薦一枚作具鍬芥小芥各

二具錄二柄造訖使南國凡直氏一人差木綿
湯執賢木引尋

御^{ナシ}贄

延喜式^{卷三十一}宮内省式云^{淡路等國}旬^年料

淡路等國^{正月三日節}同^{卷三十四}木工寮式曰

所進雜物 淡路國魚二十三斛六斗同^{卷三}

十^九内膳式曰 旬料 淡路國雜魚二擔半^{旬一}

料 節料 淡路國^{正月三節}凡淡路國進中

宮御贄者貢正月三節料 凡諸國貢進御厨

淡贄結者^志淡路國^{宣未}云々每當件日依

次貢進 同^{卷二十四}之針式上云 淡路國^{ツキ}調完

一千斤雜魚一千三百斤 自餘輸塩

庸輸米 中男作物雜藪

按^寸上^寸凡淡路^寸魚者^寸調進^寸定數

寸^寸昔^寸寸^寸之^寸淡路^寸之^寸稱^寸也

貢蘓 牛乳^之化^之蘓^之貢^之寸^之也

延喜式^{卷二}民部式下云 淡路國貢蘓番次

淡路國十壺^{四口各大一升 六口各小一升}右淡路^年十二箇

國為^年第六番^{子午}凡諸國貢蘓各依番次當

年十一月以前進了 輪轉隨次終而復始其

取得乳者肥牛日大八合瘦牛減半作蘓之法

乳大一斗莫得獲大一升但銅鉢者頭日別四
把 搗り三升と大一升と一升と一升と一升
呂仗 延壽式情心兵部省式云 沓路國核刀四
口ッ十張証第十具胡絲十具 太每年所造
具其樣仗老色別一箇附朝集使進之
零陵香 延壽式十五内藏寮曰 沓路國年料供進
沓路國 零陵香大二十四斤三十把
搗りあまふま零陵香ハ蕙草類あり蕙草ももも
零陵とといふ所の山谷よりもハ海の如くあり對
て方菱赤華として昔とと沓路よりもハと也

今は州りのりとりのり搗茶使廢ととととと
くあきとや 大一斤と六拾芥抄云 十六と五と一斤
小一と二と斤と大一斤と也也
因り北に人も南に山野と茶多なりも好好好好なりと也
人參沙參桔梗芍薬牡丹地榆葶藶黃精忍
冬香附子細辛杜衡車前麥門冬柴胡遠志半
夏射干夏枯厚朴星五味子山藥百合桔萎馬
鞭稀蒼蒼耳竜膽蒼麥首菴木艾白頭翁香薷
獨活苦參克蔚旋覆菴藿高陸墻藜通艸蒲黃
海藻石解萬蒲牛膝白薇天門冬徐長卿石葦

蘭草澤蘭蘿華劉寄奴秦皮鬼箭との外教く
河の志偽分明なるあり

土産 藤原明衡新撰樂紀論土産部法錦墨
今抄すにむく一書名ありしを今あり
俗問の云は漢錦土産を裁と武乃中節錦辛埋荆埋
光埋苦竹黄檗始なる河の志偽なるなり
土地米穀之宜く一氣味甘美く一醞釀を殊に
佳之鱗介四方海産多し一塩六むく一三原郡之
江尻塩産多し一近里多し一焼多し一今池多し
今池比福良濃多し一此の焼不られし一國南

よきす山林多し一杉河の傍に播磨
の所産多し一塩多し一夢之け外素楮漆藍多し
多し一他は一草木三草の類を植て民用此物とせし
綿八桓武天皇此の時法錦等の國へ綿種を給ひ
植させし一かゝる塩産の法錦多し一和絶一
を丁う高列而して作り作る一とて一産く作り
民間は綿布多し一織物足多し一畿内の綿を織
たり一多し一木綿布と云ふ
類聚國史卷百九 殊俗部曰桓武天皇延暦十八
年七月有一人乘小船漂著参河國以布覆背

有犢鼻不著袴左肩著紺布形似袈裟年可
廿身長五尺五分耳長三寸解言語不通不知
何国人大唐人等見之僉曰崑崙人後頗習中
国語自語天竺人常弦一弦琴歌舞哀楚閱其
資物者如實者謂之綿種依其願令住川原寺
即賣隨身者立屋西墀外路刃令窮人休息焉
後迁往近江國玉公寺十九年四月庚辰以流
耒崑崙人如實綿種幼死伊洛路所波濛岐伊
豫土佐及太宰府等諸國植之其法先簡陽地
沃壤掘之作穴深一寸裏穴相去四寸乃洗種

漬之令經一宿明且殖之一穴四枚以土掩之
以手按之每且灌水常令潤澤待生芸之

祿物價法 延壽式 卷二十六 主稅上曰祿物價法決

路等國絹五十五束絲八束鐵六束 右位祿價
直各依前

件幣物并布絕法服
季祿等直亦難此

按之に給ふと給ふ祿の代に給ふ給ふ了多數有也

運漕功賃 又曰運漕雜物功賃 決路玉法別

稻十二束 海路自玉漕与等津船賃右別一

束挾抄十二束水主十二束但挾抄水主各漕米

二斛二斗自舟准揚子國 揚子國運京車賃石分
米五升但挾抄一人水

年二
人

梅子新由と後路より 栗安道 道より功賃の
行程里数 延表式 塔二 民部省式云南海道 後路

國下管 津名 三原 為を國

梅子國より大上中下の各所へ 後路ハより 栗安道
のふりり 高野ハ栗安道より 栗安道國より

同塔二 主計式上云南海道 後路國 行程上四

日 下二日 海路六日 和名抄云上四日

下二日

梅子より上ハ上系下ハ下系あり

同塔二 主税上日 檢指田等 使程限 後路國

等 檢田四十日 不堪 佃田卅日 限給 疾死 准不

堪 佃田

梅子 不堪 佃田ハ 檢之 一々 可々の 目錄 檢付

此を せぬハ 租税を 免減 一々の ありは 法り

に 一々 あり 佃田 一々の あり

高野 今の 里数 三千 六所 一里 一々 南北 十二 里 東西 八

里 あり 梅子 新由 雜令 云 凡 度地 五尺 一々 三百 石

為 里 六尺 唐 大尺 五尺 一々 一々 三百 石 一々 一々 一々

法 一々 古 法 一々 後 路 一々 後 路 九 千 六 百 石 一々 一々 一々

驛路 延壽式十卷二 主税上曰凡諸本驛馬皆買下
百姓馬堪騎用者置之 又曰陸路國驛馬
中良大野福良各五疋 又曰驛馬直法陸路
國者上馬三百束中馬二百束下馬百束
凡諸國驛馬飼秣者國司量給 又曰驛馬死損
者近檢岫并使往還用繫飼養
陸路等十分許換一分

按すま中良より内田千孝物部守原と陸大野より
行程三里大野より唐田喜定と名島行ち地良
國衙八幡と陸福良より行程四里蓋中良より純伊
小牧田より如泉路と陸上京より古の驛次あり

又明志の海と海の時なる所より事志祝事唐田
と陸福良より内田の海と陸河崎と陸良
より南風と海より事志祝の港と事志祝
小阿那美れ海より内田の西と事志祝

形國官司 按むらうの國部守分と事志祝
と事志祝の事志祝の事と事志祝の割と事志祝
買邦の封建といふ如く今も事志祝の形跡と事志祝
名実ありて古今の通事あり候といふ所の
ありて事志祝の事志祝と事志祝の事志祝
古の國造と事志祝の事志祝と事志祝の事志祝
仁徳天皇此の時

矢口是厄と後路國造と定むる極天皇此山守
國造と改む國司や文武天皇よりして國司と
國守とありあふその姓名は國史に同くして後路は
あり國造と云原郡を國司と改むる事あり
もて交替せり凡國司四職あり守介掾目之丞藏掌
ハ令よりてり藏負令曰國守掌初社戸口薄
帳字卷百姓部課農業礼祭所部貢奉孝義田
宅良錢訴訟和調倉庫徭役兵士普使鼓吹部
驛傳馬烽候城牧過所公私馬牛閑送雜物及
寺僧尼名籍事上。國介掌同守。國掾掌礼判

国内審署文案勾稽_中暫矢寮_中非違。國自掌_下受
事上抄_上勅署文案檢出暫矢寮_中申公文_上礼_上
國司四品あり大上中下あり各と掌とあり
後路ハ系下玉あり今と國守掾目各一人と在
あり藏負令云下玉守一人目一人史生二人藏原抄
云後路國守下玉之任守一人お高從六位下掾一
人お高從八位下目一人お高少初位上 又郡司
あり大佐少佐主政主帳と每郡に在り是と郡司と
り藏負令云大佐掌下掾所部檢索郡内事上少佐
掌曰大領と改掌礼判郡内書署文案勾稽_中暫矢寮_中

遣^上主帳^下常^上受事^上抄^上劾^上署^上文案^上檢出^上稽^上矢^上彙^上申^上受^上
抄^上之^上形^上も^上大^上上^上中^上下^上少^上ありて^上受^上負^上多^上少^上あり又^上史^上生^上
あり^上後^上中^上天^上皇^上四^上年^上始^上置^上國^上史^上○^上延^上長^上云^上凡^上係^上
史^上生^上大^上五^上五^上人^上云^上下^上國^上二^上人^上あり^上む^上此^上國^上史^上あり^上子^上
かくの^上こ^上り^上又^上里^上長^上孫^上長^上候^上長^上あり^上

博士^上醫師^上 職^上負^上令^上云^上凡^上國^上博^上士^上醫^上師^上國^上別^上各^上一
人^上其^上學^上生^上大^上國^上五^上十^上人^上上^上國^上四^上十^上人^上中^上國^上三^上十
人^上下^上國^上二^上十^上人^上醫^上生^上各^上減^上五^上分^上之^上四^上

日^上中^上修^上元^上九^上十^上淳^上和^上天^上皇^上天^上長^上七^上年^上十^上一^上月^上乙
酉^上三代格十五日太^上政^上官^上符^上應^上補^上五^上畿^上内^上并^上志^上摩^上伊^上豆

近^上衛^上大^上將^上從^上三^上位^上兼^上守^上大^上納^上言^上行^上氏^上於^上以^上清^上原
去^上人^上之^上聖^上宣^上你^上在^上勅^上大^上學^上典^上業^上生^上等^上年^上二^上十^上一
以^上上^上不^上耐^上遂^上業^上者^上自^上今^上以^上後^上深^上減^上自^上續^上補^上上^上件
十^上一^上箇^上五^上博^上士^上醫^上師^上廢^上激^上垂^上帷^上之^上操^上慰^上穿^上壁^上之^上
勞^上但^上廿^上歲^上以^上下^上不^上在^上此^上限^上類聚三代格曰之
按^上之^上國^上子^上學^上校^上醫^上友^上と^上居^上之^上博^上士^上醫^上師^上法^上生^上と
補^上之^上れ^上と^上り^上

軍^上團^上 職^上負^上令^上云^上大^上鼓^上一^上人^上孝^上檢^上授^上兵^上士^上充^上備^上戎^上具
調^上者^上弓^上馬^上管^上閱^上陳^上列^上事^上上少^上鼓^上二^上人^上掌^上曰^上大^上鼓^上主^上

帳一人校尉五人旗牌十人隊正二十人
軍防令云凡軍國大設、領一千人少設、副領
按すま國ハ衆人兵士と云る人其ハ人知と國との
法教ハ衆め重々征伐の時兵士と云ハ上系して
皇威と云る士と衛士といハ是地と云る士と防
人といハ兵士五人と伍と十人と大と五十人と
隊といハ衆と云るハ軍防令と見るハ
後日中紀ハ元正天皇養老三年冬十月戊戌
減定京畿及七道治玉軍國每大小設兵等數
有差但志摩若狹淡路三玉兵士並停

按すま老老中淡路等兵士と停と云るを
と云る後後皇れと云るいさ考ハ兵士の
將と國と云ハ軍國の治と云る

押領使朝野群我曰寛弘三年四月十一日治
路玉司解指被_下因准傍例給_給官符以正六位上
高安嘉祿為正神補押領使狀謹檢按内此國
四方帶海軒指易犯况平世及澆季性亦指度
也警衛之備無人勤行望清官裁以件為正補
押領使職者將令然不慮之勤仍勤事狀謹解
按玉寛弘一條院_{六代}子_子押領使ハ軒指の使

を警衛也。為る官を。領守公使あり。進補使
あり。其の如く。や。その不^{コナ}達。勅許あり。や。前。や。い。ま。る。如。く。
史。符。六。古。改。安。符。之。

國造 四事紀國造本紀云。淡道^ゲ國造。那波。有。
津朝御世。神皇產靈。其。九世孫。矣。口。足。左。定。賜。
命。造。按。之。淡。道。ハ。淡。路。ナリ。

守掾

佐伯高孫助

廢帝北の时。淡路守之。淡路。陵。下。

少御

高屋連。並。不。か。前。の。时。淡路。掾。より。上。り。同。し。

涉柿朝臣真男

續日本後紀。卷八。仁明天皇。永

和八。乙。二月。丁。未。外。從。五。位。下。御。時。朝。臣。真。男。
為。淡。路。守。

伴高孫益友

三代實錄。卷。清和天皇。天。和。二

乙。七月。甲。子。授。正。六。位。上。淡。路。守。伴。高。孫。益。友。
等。從。五。位。下。

三善高孫氏吉

曰。淡。清。和。天。皇。貞。觀。元。年。正

月。十二。日。度。年。外。從。五。位。下。三。善。高。孫。氏。吉。為。
淡。路。守。

時統高孫治允

曰。七。年。貞。觀。五。年。二。月。十。日。癸

卯外從五位下 繼啟助時統宗稱詔允為淡路守

善道朝臣繼根 曰卷十 延和九年二月十一日辛巳散位從五位下 善道朝臣繼根為淡路守

善通朝臣根造 曰卷十 十二年正月廿七日戊寅淡路守外從五位下 善通朝臣根造為伊豆守

伴連貞宗 曰卷五十九 陽成天皇元慶五年正月云々 令淡路國云々 以弟守外從五位下 伴連

貞宗申請 祖統のりよるるるれ

佐伯直清氏 曰卷五十九 光孝天皇仁和三年二月二日丙午外從五位下 佐伯直清氏為淡路守 允河内躬恒 作者部類曰 延喜廿一年正月晦日 允河内躬恒為淡路權掾

後撰和歌集卷十五 雜部一云 ありらのりつとこの 但しそののりりちうとてきそのころ 兼柿釣臣のありの 家めえ みつ子 ひき極一人をむべとを考ふ 高 ちよとねのこころ 成よけいふか 梅よよ任ハ曰月とて雲の拾介抄に録集のや

藤原成家 因山安覺寺 死日一條院 時多原
兼家 後多原成家 為淡路國司代

梅守之守孫の人の姓名履歷國史に漏れぬ事
らん 殆ど多くて 其の如き人 淡路系多し
受領の人多し 是れは 其の如き人 省さぬ

史記申文 本邦文粹 卷日 清被殊蒙天恩 拜中
大内記 紀伊楠木立頭源方光申 他官所任 淡
路國守 國狀 為原篤茂 云云 淡路守者

一小國也 何必擇循良 望請特蒙天恩 任件等
闕載 無偏之化 仰有道之風 云云 天祿四年

正月十五日 從五位上行 國古頭 兼丹波介 藤
原朝臣 篤茂

日卷 清殊蒙天恩 因准前例 依和泉國功補
淡路守 國狀 源順 所濟功 十二箇條

以前微功 等謹甄錄 如右 抑件淡路國名 雖一
國 實終二郡 外位 從下之輩 古今所任 未也 順
苟治小國 適成大功 又忝上階 須期後賞 然而
多思 出宣 擇遠近 元林 轍魚 非枯 只求 斗升
之水 望清 殊蒙天恩 被補 件國 展翅 於仁 爪
鰓 於惠 澤於天下 弥知 明時 之不棄 前功 旧

勞矣順誠恐謹言天延四年正月廿八日散位
後五位上源朝臣順誠惶誠恐謹言

按すまのりてはとる件はととる家系より
源朝臣系よりとるに志すはるは
つみ乃源よりとる

同是 諸被殊蒙天恩因准先例拜任安房能
登溪路号園号上状 江以言 右義行云々

望清殊蒙天恩被拜任件園号 適裁就日之
恩光為慰為年之沉困云々 長徳三年五月廿
一日散位後五位下官通朝臣義行誠惶誠恐

謹言 按よりま原号茂官乃義行との

乞とてを候しは後路園号補任せしめ
いすくすん

允直氏 アタヒ 延壽式 大嘗系溪路園所造由加

物使 下當國允直氏著木綿裝束執事 上 豊木引守

終部 又曰大嘗系終部 允物部門部 終部

去左衛門府九月上旬申官願令量程参集云

云 終部云々 終路一人

按すに終部ハ氏より 日印紀 考九 天武天皇十

二年九月門部直路造等二十八氏賜姓曰連

允垂氏於此多ハ多クヨクカク友人ヲ和

健兒 コシダイ

日ヒ十ト八ハ兵部省式曰健兒汝路國三十人

按アすル健兒ハ大内ヨリ召ヒケテ下リ約スル

武家古後藏等 按アすル 皇綏出給テルル後々

源右衛門尉約六十作別の急進福使とありしより國

毎ニリテ古後とをそとみち二人とありし家ハ國司

とし武家ハ古後としり終念の代依ル本氏

小笠原氏お續クこの國の古後とありし皇威倍

振ハすル 國守れ藏廢ルぬ是利氏起リて

室町の代細河氏としり終念の古後たリし

この時汝國を嚴割據シて我討止スル細川

親世の好ニぬ氏ニ倭キチキルル其レ族ハ國

之族より安宅氏織田家の命ニ從ヒ其レ氏ニ

由路キ 仙石根坂カ多ク他ノ國ニ依リて國ヲ

依ル

依ル本經高 東經ニ十ニ正治二年七月廿七日

六波羅吞狀等列本依ル本中勢ニ經テ名ニ

違ハ自ラ為シ部ヲ等ヲ衛ル人數を經朝威條ニ也加之

今ニ古ノ後依終國之間茂如國司命余ヲ妨ニ國勢をテ

所行之企奇怪逃一早可達國東之旨及勅余

云々八月二日乙酉佐々本領高蒙所気危決
然所彼古依所望之今國古復職以下所帶高
被召致之

横山時兼 日持二建曆三年三月五日義盛

時兼 横山古 以下係反之紫所領高依決然

等國古復職横山莊以下為宗之所之先以收
公之

小笠原長經 兼之中小笠原孫高而長經為

後領高古復武林傳之出

按了了建武 後醍醐 比之也高也於中笠原氏古復

職之 とみ 之 とみ 之 とみ 之 細川氏之屬也

既流法然人 繪日印紀持二桓武天皇延曆元

年閏正月丁酉獲氷上川繼 物王 於大和國

葛上教詔曰氷上川繼潛謀乱事既奪免執部

逐合極刑其母不被内親王及逆近親亦合重

罪以諒圖 仁 之始山陵未乾哀感之情不忍論

刑宜免其死而處 中 之遠流不破内親王并川繼

姊妹者移既流路國 日本後純法桓武天皇

延曆十四年十二月乙酉既流路國不破親王

王移如泉國

日本後紀^{四卷} 延暦十七年戊寅二月壬子朔美
法園村國連要人既流法路國以停宿群盜後
百姓也

紹運孫云長屋王之子山背王流法路

東鑑^九曰文治五年己酉五月十七日丙子彼

呂返流人藤原賢定^{平法路}

今昔物語云世俗傳云平維衡曰致賴合我輩智

浩今昔前の一條院の法字より平維衡といふ兵

河これハ隆興也貞盛といひ兵の孫^{孫苗}又^孫子又^孫子

平致賴といふ兵ありあるに兵の孫といふは

るまに河もやにさかするもなりて致とありぬ

者^孫合我も致月より子孫傳我命も春屋討元す

者^孫合我も致月より子孫傳我命も春屋討元す

者^孫合我も致月より子孫傳我命も春屋討元す

者^孫合我も致月より子孫傳我命も春屋討元す

者^孫合我も致月より子孫傳我命も春屋討元す

者^孫合我も致月より子孫傳我命も春屋討元す

者^孫合我も致月より子孫傳我命も春屋討元す

者^孫合我も致月より子孫傳我命も春屋討元す

郷を極し一ひありしをゆきまきかこしよよつて公家
宣旨をくまらぬ致れをいさく流及み流れ維徳
といは流路を極郷せぬ

按上平維徳の系系曰帯刀上總介権少將從四位下平致
頼考平丑大夫。公雅男。世以致頼維徳の流傳昌稱武勇云

雜傳 紀貫之土佐日記曰流路のたぐめといひひこのよめ

く、追風のふきぬるときはゆきあひのわらへらうとて
くれかきぬ 又曰流路の物の巨子オホイユみやこちかくか
まぬといふをよるこひしあうこようかうとてひけて
かくさうるしりかこしをわらうつるあはまかこらうとて

うげてみあひきたり 按上紀氏土佐傳の伊とて系
よよの時考女も舟中へ付ひし多し日本紀考如名大
字女
今唯老女為太字女流路傳の巨子もは今も七ひる
ひりあきこえてハ辭てあり

流路小聖 和泉國大鳴山縁起云昔未詳何時世有流
路小聖者屢上下禁闕宮嬪賤此云志津見小聖怒念

忽發寤寐無忘因通花鳥使小聖漸入此山賤追
至巖徑白雲掩映俄失小聖所去賤不勝悲泣之
至愁死于路傍 葛城峯中記云大鳴不動堂行
者寤基流路小聖再建也

未国安 鍛上譜云泚路国鍛国安後醍醐天皇時人也号泚路來

雜著 日本紀卷一仁德天皇紀曰游宇宿祢啓大鷦鷯尊曰臣所任比田者大中彥皇子距不令治大鷦鷯尊問倭直祖麻呂曰倭比田者元謂山守地是如何對曰臣之不知唯臣弟吾子籠知也適此時吾子籠遣於韓國而未還爰大鷦鷯尊謂游宇曰尔躬往於韓國以喚吾子其兼日夜而急往乃差泚路之海人八十為水手往于韓國

按應神紀御原海人履中紀野島海人

同卷二天武紀四年二月乙亥朔癸未勅大倭河內撰津山背播磨泚路丹波但馬近江若狹伊勢美濃尾張国曰選所部百姓之能歌男女侏儒伎人而貢上

同 崇峻紀曰物部大連元欲去餘皇子等立穴穗部皇子為天皇及至於今望因遊獵而謀替立使人於穴穗部皇子曰願與皇子將馳獵於泚路謀也

同卷二齊明紀注或本云有間皇子先燔宮室オホミヤ

以五百人一日雨夜邀年婁津疾以船師斷泚路國使如牢固其事易成諫不可云云
續日本後紀卷八曰仁明天皇承和十一年五月辛丑泚路國言他國漁人等三千餘人費王臣家牒群集濱浦寬凌土民代橫山林雲集霧散濫惡不休又官舍驛家皆在海邊而接居波間譬猶魚鱗後有大災可難撲滅勤加禁斷國力不足請官符皆悉禁制官宣嚴加禁止勿令更然如不遵制旨尚致濫猾立加決罪以懲將來但所犯之罪杖罪已上者勘錄所犯及姓名

早速言上

三代實錄卷五清和天皇貞觀三年冬十月廿八日戊辰太政官論奏曰泚路國浪人物部冬男聞殺錦織廣人國司斬而言上法官覆案罪當斬詔減死一等處之遠流

同卷六四年五月廿日丁亥述者海賊往々成群是日下知泚路阿波云云等國差發人夫追捕海賊

同卷九陽成天皇元慶五年四月廿八日乙巳先是去年四月八日大膳史生矢田部氏長奸

使海上教基とて阿波志とて後詔云とて純
友國府とて教大とて公叔の成とてつひとて凡世
の事とて一とて月とて經て人教とて信とて後及てとて
と長友とて海經基とて次友とて志大藏春實とて典とて攝摩後及二
刺友とて志大藏春實とて典とて攝摩後及二
箇とて教とて一とて月とて經て人教とて信とて後及てとて
よ折むかあ友使とて一とて月とて經て人教とて信とて後及てとて
る友原恒利とて一とて月とて經て人教とて信とて後及てとて
作とて及て恒利とて攝摩後及二とて典とて攝摩後及二とて

内とて多國風かきと指南とて一とて月とて經て人教とて信とて後及てとて

行幸事蹟 日本紀卷下小注曰一日應神天皇十三
年天皇幸淡路島而遊獵之

又曰應神天皇二十二年秋九月辛巳朔丙戌

天皇狩干淡路島者云云 既載干淡路島條故畧之 故乘輿

遊之天皇便自淡路轉以幸吉備遊干小豆

島

古事記卷下仁德天皇紀曰大后石之日賣命

甚多嫉妬尔天皇聞者吉備之海辺直之女

黒日賣其容姿端正喚上而使也然而畏其大

后之嫉逃_一下本國於是天皇恋其黑媛欺_二大后
曰欲見_三泚路島而幸行之時坐_四泚路島遙望歌
曰於志氏流夜云云御製我_三于_四磯乃自其島傳

而幸行吉備國

日本紀卷十履中天皇五年秋九月天皇狩于

已下載伊
佐奈岐社

泚路島云云
又卷十允恭天皇十四年秋九月癸丑朔甲子
天皇獵于泚路島云云以下曰
上故略

賑恤 續日本紀卷一文武天皇元年丁酉閏十二

月己亥播磨備前備中周防泚路伊豫等國飢

賑給之又勿收_二負稅

同卷二大寶元年八月甲寅播磨泚路紀伊三國言大

風潮漲田園損傷遣使巡_三監農耒存_四問百姓

同卷十聖武天皇天平三年八月辛丑詔曰今

歲登穀朕甚嘉之宜免_二京及諸國今年田租之

半泚路云云等國租者咸免除之

同五年正月泚路等國去年不登百姓飢饉勅

賑貸之 同三月癸丑遠江泚路飢賑恤之

同八年三月丙辰泚路國比年亢旱無_二種可播

紀伊國使郡稻以充_三種子 同夏四月泚路國

疫賑給之 高野天皇神護慶雲元年二月辛卯
淡路国頻旱乏種稻博播磨國加古印南等郡
稻四万束出奉百姓 同丙午淡路國飢賑給之

日本後紀卷桓武天皇延曆十八年巳卯十一月
戊申免淡路國今年調庸以風水為災百姓被害也

同卷同二十四年十二月癸卯免淡路國浪人今年調庸

同卷九弘仁元年五月丙辰淡路國飢遣使賑給之

同卷十 淳和天皇天長元年申辰四月庚子淡路國言上民飢令賑給

續日本後紀卷仁明天皇養和二年七月丙午漕讚岐國正稅穀以賑淡路國飢民

同卷同四年三月辛未和泉淡路兩國飢賑給之
按今も國の事は飢困なり小正應より使と遣て
給ふも一窮民に賑貸し飢人に食と賜ふ善政と
りし也

式内十三座 延喜式神名帳曰淡路小十三座 大
座小十座 津名郡九座 大一座 三原郡四座 大一座
一座 小八座 小三座

